
目覚めたらファンタジーな異世界でした。

雨と傘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目覚めたらファンタジーな異世界でした。

【Nコード】

N5353V

【作者名】

雨と傘

【あらすじ】

目が覚めたら森の中。そして何故か体が縮んでました。私を拾った研究者で魔術師な転生者のフェイさんによると、ここはファンタジーな異世界らしい。…うん、フェイさんの魔法が凄かったので魔法を使えるようになりたいです。そのうち。何故か4歳（推定）になってしまったハルキがファンタジーな異世界でそれなりに過ごす話。基本ほのぼの（をを目指したい）恋愛要素ありません。

寂しい場所

真っ白い世界

どこまでも白くて白い世界

大地と空の境目などなく

風も吹かず、音もなく

冷たさもなく、暑さもなく

光もなく、影もない

そんな世界にその人はいる

白い髪

白い肌

白い服

白に満たされた世界で紅い唇を微笑みの形に歪ませて笑うのだ

私達の間にはなにもない

言葉も感情も思惑もなにもない

それでも彼女は笑う

私は…私は？

そして私は目覚ましの音で目を覚ます

体を起してあの白い場所が夢なのだと思います

そしていつも私は思うのだ

あそこは寂しい場所だと

プロローグ＝はじまり

だんだんと暗くなっていく森。纏わりつく風は冷たい。
遠くに聞こえる狼の遠吠えに恐怖が甦る。

怖い、寂しい。

ぼろぼろと涙が頬を伝う。

膝からは血が流れている。

ズキズキと痛み、それが恐怖に拍車をかける。

誰もいない森の中。

薄暗い森の中。

一人ぼっちの森の中。

一人は寂しい。

一人は怖い。恐いよ。

恐い、怖い、寂しい、いやだ。一人はいやだ。

いやだ、いやだよ。

ねえ、だれか…たすけて。

「なんで、こんな所に子供がいるんですか。」

光が、蛍のように飛んでいる。

淡い金色の光が、ふわふわと舞う。

その人は私を抱き上げて、大丈夫だと言ってくれた。

暖かさを感じながら、私は眠りへと沈んでいく。

涙が一筋、零れていった。

人生なにが起こるか分からない

誰かが言っていた。人生なにが起こるか分からないものだ。

私もそう思う。同感だ。

未来は誰にも分からない。だけど、なんとなく想像はしていた。

高校を卒業して大学に行って就職して恋愛なりお見合いなりして結婚するのだろうと。

子供は出来れば3人ぐらいで老後は田舎でゆっくりと過ごして子供や孫やできればひ孫に囲まれながら大往生：そんな人生だったら言う事なしだった。

自分が人を好きになるなんて想像できないけど。刺激的な人生が欲しかったわけではない。

けどもう一度言おう。人生なにが起こるか分からない。

とりあえず私の身に起こった出来事をかいつまんで説明しよう

学校の帰り道に貧血を起こして倒れて気が付いたら森の中にいてなんか狼っぽいのに追いかけてられて美形な研究者で魔術師な転生者に拾われました。まる。

わけが分からないだろうが、これが私の身に起こった事だ。詳しく説明していこうと思う。

私はしょっちゅう貧血を起こす訳ではないんだけど、たまになるんだよね貧血。遅刻しそうになって朝ごはん抜いたのが原因だと思うけど。朝ごはん食べればよかったと後悔しながらブラックアウト。で、気が付いたら森の中にいました。

狼っぽいのは シーザ というモンスターだそう。三つ目……
まり額に第3の目があるモンスター。

毛色とかは私の知っている狼なんだけど、額に目があって怖かった。

しかも群れで追いかけてくるから怖かったよ。

そこを美形な研究者で魔術師な転生者のフェイ・クルーニクスに
拾われた。

私は親しみを込めてフェイさんと呼んでいて、綺麗な女の人と間違えそうなほど綺麗な人だけど男だ。ベージュのような優しい色の髪と目をしている。

聞いたことないから推測だけど歳は20代後半。

そして、前世の記憶がある人だ。

たぶん前世は私と同じ所。いろいろと共通点があったし、間違いないと思う。

フェイさんにはいろんな事を教えてもらった。

ここが私がいた場所とは違う事。

エルフ族や獣人族といった種族が存在する事。

魔法という力が存在する事。

そして私の体が小さくなっているという事。

驚きや戸惑いもなく、それは事実としてストーンと胸に落ちた。

フェイさんは私が取り乱したりすると思っていたらしく、ちょっと驚いていた。

体が小さくなっていたのはちょっと困ったけど。ちょっと困っただけだった。

ちなみにフェイさんは光を操る魔法を使える。

実際に見せてもらったけど、とても不思議でとても綺麗だった。私にも使えたらいいなってフェイさんに言ったら、今度魔力を調べれる道具を持ってきてくれるそうだ。

魔力は魔法が使える力で、魔力があると魔法を使えるんだって。ちよつと楽しみ。

以上が私の身に起こった事。本当に人生なにが起こるのか分からないよね。

あつちの世界で私がどうなっているのか気にはなる。だけど寂しいとか未練はない。

あつちより危険が多い世界だけど、帰りたいとは思わない。来てしまったのは仕方が無いと思うし、過去に戻る訳でもないから。

どうして私なんだろうなーっていうのは気になるけど。

そんな私はフェイさんの家で家事とかをこなしながらこの世界の事を教えてもらっている。

いや、家というよりは屋敷といったほうが正しいかもしれない。

森に囲まれた屋敷。

体が小さくなって動き辛いけど、これはこれで新鮮。

カウハラ ハルキ
河原春樹16歳。4歳になってしまいましたが、楽しくやっています。

胸がきゅってするのは

フエイさんが真剣な面持ちで紙に書かれた文字を読んでいる。
私は緊張しながら結果を待つ。
刻々と時間が流れる。

「…うん、問題はないですね。」
「やったー！」

思わずガッツポーズ。よかった、やっと終わった！

「まさか3ヶ月で書けるようになるとは思いませんでしたよ。」

今、私がフエイさんに教えてもらっていたのはこの世界で広く使われている公用語。この世界ではほとんどの人が使える言葉だ。

「んー、頭の中にある知識と照らし合わせながらだから書けるようになるのが早かったのかも。」

「なんて言うか…ずるいですよ。私はこの世界に来た時は言葉が全く分からなくて苦労したのに。」

「不思議だよな。私はこっちの言葉を知らないのに話せるし読めるなんて。まあ、公用語だけだけど。」

「それだけで十分ですよ。」

そう、なんでか分からないけど私はこっちの言葉が話せるし読める。

今フエイさんに教えてもらっていたのはシェイア公用語の文字。
読めるんだけど書けるようになるまで3ヶ月かかった。

「でも、自分の知らない言葉を当り前のように使えるのは変な感じ。ちよつと怖いかな。」

「…まあ、ラッキーだと思っておけばいいですよ。それより、紅茶が飲みたいです。そろそろお茶にしましょうか。」

フエイさんは紅茶が大好きだ。一日に何回も飲む。もはや紅茶中毒と言つてもいいと思う。

「私は砂糖入れてね。」

「何言つてんですか。ハルキも手伝うんですよ。」

「えー、4歳児に手伝わせるんですかー。」

「中身は16でしょう。」

ここに来て3カ月とちよつと。

軽口も言い合えるようになった。それが嬉しい。あっちでは、そんなこと出来なかったから。

胸がきゅつとなつて、温かい。

胸がきゅつて苦しくなるのは、悲しい時だけじゃないんだね。

「…?どうかしました?」

「なんでもなーい!」

世界への第一歩

それは半年がたった頃。始まりはフェイさんの言葉だった。

「ハルキ、インクがどこにあるのか知りませんか？」

「知らないけど…インク切れたの？」

「そうなんですよ。仕上げないといけない資料があつて。困りましたね。…そうだ、明日『市場』に行ってみませんか？」

「市？それって私が知っているのと同じ？」

「同じだと思いますよ。いろんなものを売っている場所です。ハルキは外に出たことないでしょう。」

「…そういえば森の外に出たことない。」

よく考えたら街とかに行つたことがない。食料とかは運んできてもらつてるし。庭広いし、散歩なら森を歩けばいいし。

「ね。行ってみませんか？用事があるから、ついでに見て回りますよ。」

「うん、いいよ。」

そんなこんなで、初めての外出決定。

…ちよっとめんどいと思つたのは秘密。

初めての市場

第一印象は『賑やか』だった。

ずらりと簡易な店が並んでいて、人の声が溢れている。見た所、食べ物売っている店が多いみたいだ。屋台っぽい店もある。いい匂いだな！。

「フェイさん、いい匂いがするね。」

「いつもこんな感じですよ。」

「へー。」

私の今の恰好は目深に帽子をかぶって、シンプルな半ズボンをはいている。帽子の中に髪を全部入れているから男の子に見えるとと思う。

フェイさんが言うには黒眼は珍しいから、隠しとけだそうだ。

「とりあえず、用事を済ましてから見て回ってみましょう。」

「賛成。」

フェイさんに手を引かれて歩き出す。こういう時さりげなく手を引いてくれる所が優しいと思う。

「フェイさん、あれなんですか？」

「あれは『リママ』という葉物野菜です。苦味があります。」

「じゃあ、あの吊るしてあるのは？」

「『ハシユムル』です。」

南の方で獲れた魚を干したもので、『ハシユムル』は魚を干したものの総称です。

この辺りは海が遠いですから、新鮮な魚介類が手に入りにくいん

ですよ。

その代り、森や草原などが多い。

だから新鮮な野菜や果物が多いんです。」

「へー。」

どれも初めて見るものばかりで楽しい。

知らないものばかりで、質問ばかりしてしまう。

「…ああ、ここですね。」

綺麗な柄の布が並べられている店の前で止まる。ほかには食器や本が数冊山積みになされていたり、色々な物が置いてある。

「なんか、ごちゃごちゃしている店ですね。」

「雑貨屋みたいなですよ。」

「いませんね。…おーい！」

フエイさんが大きな声を出すと、店の奥から物音がした。のそのそと大きい影が歩いてくる。

「ほいほい、なんのご用ですか…。」

店から出てきたのは、熊みたいなおじさんだった。

豪快なおじさん

「ん？」

店から出てきた男は私達を見て、訝しげな顔をした。だけど、次の瞬間には凄く嬉しそうな顔になった。

「おー！フエイじゃねえか！

ひっさしぶりだなー！元気にしてたか？」

店から出てきた男は豪快に笑いながらフエイさんの背中をバシバシと叩く。

なんか、熊みたいな人だ。

頭には布を巻いているから、工事現場のおじさんみたい。

「ん？お嬢ちゃんは坊主の連れか？めっずらしいな〜！お前が誰かここに来るなんて。初めてかもしれないぞ！」

おじさんがしゃがんで目線が同じ位置になる。

あれ、この人耳が長くて尖ってる。

それに布の間から見える髪の毛が緑色だ。

もしかして…。

「お嬢ちゃん、名前はなんだ？」

これ、答えた方がいいのかな？

ちらつとフエイさんを見たら頷いた。

「…ハルキ。フエイさんにはハルって呼ばれてる。」

「おーそうなのか。歳はいくつなんだ？」

「…4歳。」

「そっか、4歳か。しっかりしてんなー！」

村の悪ガキどもに見習わせたいぐらいだ。

ちゃんと答えられた良い子にはこれをやろう！

ほーれ、手え出せ。」

慌てて手を出すと、手のひらにコロコロと丸い物が落ちてきた。なんだろう、これ。色は茶色で、クッキーみたいだ。

「フエイさん、これなに？」

「『クク』というお菓子ですよ。」

「女房が作ったやつだ。絶対うまいから一回食べてみるって！」

女房ってことは奥さんいるんだ。

『クク』はほのかに甘いにおいがするから、甘い物なのだろう。

おそろおそろの口に入れてみる。

「どうだ？」

「…おいしい。」

口の中でほろほろと崩れる。

ほろ苦くて、ココアみたいな味だ。

「そっかそっか！そりゃあよかった！」

お礼とか言った方がいいよね。

「…おじさん、ありがとう。」

「どーいたしました！そーいや、まだ名前言ってなかったな。俺の

名前はジエイドだ！」

「ジエイドさん？」

「さんは付けなくていいぞ〜。」

「じゃあ…ジエイドおじさん？」

「お！いいな、そのジエイドおじさんっていうの。」

ぼむぼむと頭を撫でられて、ちょっと帽子がずれたと思ったたらジエイドさんが直してくれた。

なんか恥ずかしい…嬉しさもあるんだけど。

「…鼻の下伸ばしてないで仕事してくださいよ。」

「おー、悪いな。で、なにが必要なんだ？」

フエイさんを見ると、ムスツとしていた。

ジエイドおじさんはちよつとニヤニヤしている。

…なんで？

「いつものインクを多めに。」

「了解。ちよつと待ってる。」

ジエイドおじさんが店の中に入っていく。

出てきたと思ったら、小さめの木箱を持っていた。

「ほい、これでいいか？」

「はい、大丈夫です。」

そういうと、フエイさんはジエイドさんに何かを渡した。

よく見えなかったけど、お金だと思う。まだ知らないから、教えてもらわないとな。

「ちょっと市場を見て回るんで預かっておいてもらえませんか？」
「ああ、いいぞ。見て回るってことはハルキは市は初めてか！それなら、あっちの広場で面白いのがあるぞ。」
「そうなんですか。行ってみましょうか、ハル。」
「うん。」

また後で、とジェイドさんと分かれて歩き出す。
面白いのってなんだろう。

閑話：エルフ族

店からだいぶ離れた。

ちよつと疑問に思った事を聞いてみる事にした。

「ねー、フエイさん。ジエイドさんってもしかして『エルフ族』？」
「…あれ、ハルにエルフのこと教えましたっけ。」
「うづん、まだ教えてもらってない。だけど、本でちよつと読んだ。」

「そうですね…。あたりです。ジエイドはエルフ族ですよ。」
「やっぱり。だけど、エルフって色白で細いイメージがあったからちよつとびっくり。」

挿絵のエルフもそんな感じだったし。
「まあ、そうですね。」

エルフにもいろんな人がいますよ。」

「へー。」

人魚の舞と肩車

広場に着くと、沢山の人がいた。軽やかでリズムの良い音楽も聞こえてくる。

なんか、面白そう。だけど、人で見えない。こういう時体が小さいと不便だなー。

「ハル、見えないでしょう。抱っこしましょうか？」

「うーん…。」

抱っこしてもらえば見えると思うけど…。

むー、と悩んでいると今の私と同じぐらいの子供の声が聞こえた。父親らしき人に肩車してもらって、きゃっきゃと笑っている。

…あ。

「フエイさん、肩車して。」

「肩車ですか？」

「うん、肩車。肩車やったことないから、やってみたい。」

「いいですよ。」

フエイさんに両脇を抱えられて、肩に乗せられる。

…私、しゃがんでもらって肩に乗っかるのをイメージしてたんだけど。

「どうですか？」

「すごい高い。」

景色が一転した。

見上げていた物が、下の方にある。空が近くて、風が気持ちいい。

ちょっと不安定だけど、フェイさんが支えてくれているから大丈夫。

目線が高くなったおかげで、見えなかったものが見えるようになった。

人の中心で女の人が踊っている。腰には長い布を巻いていて、踊るたびにひらりと舞う。

後ろにはトコトコと太鼓に似た楽器を叩いている人がいる。

そして周りにキラキラと水が舞っている。

踊り子が舞うたびにサラサラと動いて、きれい。

「すごい。あれがジエイドおじさんが言っていた、面白い物？」

「そうですよ。『人魚の舞』という踊りです。」

元々は雨乞いや荒れている海を沈めるなどの『水』に関する儀式でした。ですが今では踊りの一つですね。ここからでは見えないですけど、踊り子の腰に巻いてある布は鱗の模様なんです。それで、人魚を表しているんですね。」

「へー、そうなんだ。」

太鼓の音がだんだんと早くなっていく。

それと同時に踊りも早くなって、水の動きも早くなる。

くるくると水が舞う。水の中で人魚が舞う。

無性に、人魚という存在に会ってみたくなくなった。

『人魚の舞』が終わると、私達はいろんな所を見て回った。

アクセサリー屋みたいな店には若い女の子がいて、あちこちでおばちゃんが話していた。

屋台のおじさんはちょっと顔が怖かったけど、売っていたお団子っぽいものはとてもおいしかった。
歩きまわって、食べて、たくさん話して笑って。とても楽しかった。

歩き疲れてしまって、今はフェイさんに抱っこしてもらっている。
瞼が重くなってきた、目をこする。

「ハル、眠いんですか？」

「…うん。」

「寝てもいいですよ。」

「…うん。」

とろり、と眠気がやってくる。

「おやすみ、ハル。」

優しいフェイさんの声。暖かい腕はなんだか安心する。
柔らかい眠気に誘われて、私の意識は沈んでいった。

side・フェイ：いつか、離れてしまっけど

腕の重みが少しだけ増した。ハルの顔を見れば、すやすやと眠っている。今日は歩きまわったから疲れたんだろう。

ハルが来てからもうすぐ4カ月。

ハルは凄い早さでこの世界の知識を吸収している。

教えている時のハルはとても楽しそう。興味深々、という顔をしている。

それで教えるのが楽しくて、沢山の事を教えてたくなる。

恐らく、ハルは私と同じ世界から来たのだろう。

私は一度死んで、この世界に生まれた。

その事実が受け入れなくて、昔は全てを拒絶していた。残してきたものを想って、泣いた事もあった。

あいつに出会っていなければ、まだ世界を拒絶していたのだろう。

…もしかしたら、世界を壊そうとしていたかもしれない。

でけどハルは世界に戸惑う事もなく拒絶する事もなかったただ受け入れた。

体が幼くなっていることも知らない言葉が分かる事も受け入れた。元の年齢は16だと言っていたが、大人びていると思う。

…いや、大人びているのではない、達観している。諦めているようにも感じた。

「あー、寝ちまったのか。」

「疲れたみたいですね。」

眠る顔は安心して見えるようにも見えて、信頼されていると思つて嬉しい。

「しつつかし、お前が人を連れてくるなんて驚いたぞ。

しかも仲良く手を繋いでなんてな。

「ハルキは、お前の家に住んでるのか？」

「はい。」

「そうか。お前が傍に誰かを置くななんてな。

しかも一人前に嫉妬なんてしやがって。あれは笑えたぞ。」

「ほつといてください。

あれはちよつと…横取りされたみたいで嫌だったんですよ。」

「横取りねえ。…お前ももう父親かあ。」

「たしかに、養父みたいなものですけど血は繋がってませんよ。」

「俺には父親のように見えるけどな。」

「そうですか。」

父親か…。いまいち、ピンとこない。

だけでもし子供がいたら、こんな感じなのだろうか。この子の成長が嬉しくて、楽しみで。心配で、待ち遠しい。

「なあ、フェイ。」

「なんですか？」

「…この子は『風』だよ。」

「…。」

「風に舞う綿毛みたいにふわふわと飛んで行っちまいそつだ。飛んで行かないように見とくんぞ。」

「言われなくても。」

言われなくても、分かっている。

森の中で泣いていたこの子を見つけた。これもなにかの縁なのだろう。

「…あつはつはつは！やっぱりお前は父親だよ。顔が父親だ！」

真剣な顔から一転、豪快に笑う。

この人は本当に変わらない。

「どんな顔ですか。」

早く帰りたいんで預けていたの返してください。」

「はいはい、分かったよ。」

ジェイドが苦笑しながら店の中に入っていく。

ハルキを抱えなおすと、帽子がずれた。

この世界にも、黒髪黒眼の人間はいる。南のほうの物凄く超田舎にいます。それに私は東洋人のような人にこの世界で会った事

が無い。

どこの世界でも物好きはいる。目をつけられたら危ない。

…頼んでいた物、早めてもらうか。

顔立ちを変えられなくても、目の色が変わるだけで印象は結構変わるからな。

「ほれ、これでよかったよな。」

「はい。…あれ、これは？」

インクが入っている木箱の上に、買った覚えのない物がおいてある。羽がいくつか付いた紐で、紐の両端には細工の施された銀色の金具が付いている。

「髪を結ぶやつなんだが、ハルキに似合うと思ってな。」

「いいんですか？」

「ああ、いいともさ！」

お前の娘は俺の孫だからな！」

その言葉に目を見張った。

この人は…。あんなに拒絶していた『俺』を、『息子』だと言ってくれるのか。

「…ありがとうございます。」

オババさまに、その内顔を出すと言っておいってください。」

「おー、分かった。」

ほれ、早くしないと日が暮れるぞ。」

「はい、それじゃあ。」

ハルを片手に抱えなおして歩き出す。

反対には木箱を持っているから、ちょっと重い。

この子との生活は、思っていたよりも心地よい。

だけど、ずっと一緒に暮らせるわけではない。私は、人であって人で無い。だから、いつか別れの日が来るだろう。それは、絶対不変の未来だ。

だけど、その日が来るまでは。

その日が来るまでは、見守っていたい。

沢山の事を教えて、沢山の事を経験させてやりたい。

もしかしたら、前の世界に帰ってしまうかもしれないけど。

帰りたいと願っているかもだけど。

世界を越えて、離れてしまいかもしれないけど。

同じ世界にいても、離れてしまっただろうけど。

それでも。

腕の中の存在を、この重さを離してしまわないように。落としてしまわないように。抱きしめた。

s i d e ・ フェイ：いつか、離れてしまっけど（後書き）

フェイにも色々あったんですよ、な話。

フェイの過去はそのうち詳しく書きたいと思っている。

朱色が運ぶ知らせ

「え…友達って事なの？」

「違います。知人です。」

ある日の午後。

やる事も終わって、私は庭で日向ぼっこをしていた。

そのに急にフェイさんが来て「人が来る。」と言われた。しかも、何故か肩に鳥を乗せながら。

「そうなんだ…。っていうか、フェイさん知り合いがいたんだね。」

「どういう意味ですか。」

「いやー、だつてさ。」

この家に来るのは食料とか運んでくれるお兄さんだけだったし。

フェイさんの知り合いとかが、訪ねてきたのって一度もなかったから。

フェイさんもフェイさんで、ずっと研究ばかりだし。

あ、でもジエイドおじさんが知り合いになるか。

「前に言っていた、魔力を調べる道具をついでに持ってきてくれる
そつですよ。」

「そついえば、そんな話もあったね。」

それで調べれば、魔法が使えるようになるの？」

「訓練次第です。」

すっかり忘れていたけど、私にも魔力があるんだっけ。

魔力は魔法の源。魔力があると魔法が使える。ただ、魔力には『属性』があつて、それを調べないと使えないんだっけ。

「そっか、訓練次第か。」

で、その鳥はどうしたの？」

鳥はずっとフェイさんの肩に止まっている。

大きさはインコぐらい。色は鮮やかな朱色だ。

「ああ、これですか。」

この鳥は『エルク』といいます。手紙を運ぶ鳥ですよ。」

「へー、そうなんだ。」

エルクは小首を傾げたり、ちょこちょこ動いたりする。

それに合わせて長い尻尾がふりふりと揺れる。

「…ちょっと、触っても大丈夫？」

「大丈夫ですよ。」

ゆっくりと、驚かせないように近づく。

近づいても逃げない。人慣れしてるのかな？

まあ、フェイさんの肩で大人しくしてたし、人慣れしてるよね。

軽く頭を撫でてみる。

気持ち良さそうに目を細める。

「かわいい。」

ぼわぼわしていて、ちょっと暖かい。

かわいいなー。

「ハルは、動物が好きなんですか？」

「え？…うーん、嫌いではないよ。」

「そうですか。」

フェイさんがエルクに手を近づけると、ちよこんと飛び乗った。
手乗りインコみたいだ。

「手紙の返事を書き終わるまで、遊んでていいですよ。」

「いいの？逃げたりしない？」

「大丈夫です。」

エルクが止まっている手に、私の手を近づける。
すると少し躊躇した後、私の手に飛び乗った。
軽い重み。

「ありがとう、フェイさん。」

鮮やかな朱色の小鳥。

青い空に飛んだら、綺麗なんだろうな。

第一印象はダンディー

その人は、『竜車』に乗ってやってきた。

「フエイが子供を拾ったっていうから来てみれば、なんとも可愛らしいお姫様だ。かの月の妖精も君を見れば裸足で逃げだすだろう。ほう、君の瞳は遠くからだと夜空のような色なのに近くで見ると琥珀のようだね。なんとも不思議で、引き込まれそうになる色合いだ。」

私の手を取り、口説き文句を言っているこの男はフエイさんの…友達らしい。

白髪まじりの黒い髪にシルバークレイの目。

一言でいえばダンディーな人だ。チヨイ悪おやじでもいい。

歳は…50代ぐらいだと思う。

対して今の私は5歳ぐらい。…守備範囲広すぎませんか？

「えっと、ありがとうございます？」

あと手を離してくれと嬉しいです。

「…変わらないですね、あなたは。女性と見れば見境無しですか。」

「私が口説くのは魅力的なレディーだけだよ。」

あ、やっと離してくれた。

「ああ、自己紹介がまだだったね。
私の名前はサム・シエラス・カーウエル。フェイの古い友人なん
だ。」

「私は、…ハルキです。」

「ハルキ…可愛らしい名前だ。」

カーウエルさんは情熱的な人らしい。
窓を見れば、カーウエルさんが乗ってきた竜車が止まっている。
クリクリとした目、走るのに特化しているのか、前足は小さい。
大きさは馬より少し小さいぐらいだろうか。車には2匹繋がれて
いる。

すっごい気になる。

だって初・ドラゴンだよ。

しかも馬みたいに車を引っ張ってきたんだよ。

「あの、カーウエルさん。」

「なんだい？お嬢さん。」

「あのドラゴンって触っても大丈夫なんですか？」

「ミニラをかい？」

へー、ミニラっていうんだ。

触るとどんな感じなんだろう。やっぱりトカゲみたいなのかな。
ワニとかに近いかも。触ったことないけど。

「大丈夫ですよ。ミニラはおとなしいですし、人に慣れてますからね。」

そうフエイさんが言うと、カーウェルさんは少し考えるような素振りをみせた。

「そうだね、御者が世話をしているから、言ってみるといい。」

「はい！」

Side・フェイ・旧友（前書き）

お気に入り50件突破しました！

本当にありがとうございます！

感謝感激です。

side・フェイ：旧友

外では、ハルキがミニラを嬉々として撫でている。

その顔は本当に嬉しそうで、初めてのドラゴンに興味津々のようだ。

「あの位の子はミニラを怖がるんだけどね。

お転婆なお姫様だ。将来が楽しみだな。」

満足りにならずく目の前の男は、出会ってから30…いや、40年は経つのに変わらない。

呆れるほどの女好き。女と見れば見境無し。…いや、こいつに言わせれば魅力的なレディーだけだったか？どこからどこまでが魅力的な女性になるんだ。こいつが口説かなかった女は見た事が無い。

「だが、まあ…手紙には驚かされたよ。お前が子供を拾って、更には育てるなんて書いてあるんだからな。しかも女の子ときた。本当はもっと早く来たかったんだが、忙しくってな。」

「…ここに来れたって事は、引退したってことですか。」

「ああ、やっとだよ。これで俺も隠居できる。」

サムは、貴族だ。

この世界ではミドルネームがつく者は貴族階級以上。位が高くなるほどミドルネームも多くなる。

今は平民が来ているような服を着ているが、よくみれば目立たないような刺繍がされている。着心地もいいのだろう。

息子に家督を譲って隠居するとは手紙で知っていたが…時間がた

つのは早いな。

「とりあえず金と時間はあるから観光をしようと思ってな。そのついでに寄ったんだが…いやー、来たかいがあったな。…と、忘れるところだった。頼まれていた物、持って来たぞ。」

紙の束と布に包まれた物が机に並べられる。

「属性検査用紙は5枚もつてきた。これは魔力を流すだけのタイプだから5枚あれば大丈夫だろう。」

そっちは注文通りに出来ている。」

布に包まれた物を手に取り、布を開いていく。

「風属性の魔石を使って、目の色を変える術式が彫られている。それを作らせた職人が、これがまたいい女だな。紅い髪に紫の瞳…。情熱的で神秘的。つれない所がさらに魅力を引き出しているな」

布に包まれていたのは、一对のピアス。

予想していたのよりも小ぶりで、普通のピアスにしか見えない。よくここまで小さく出来たものだと感心する。

「凄いな…『魔道具』だとは思えない出来栄えだ。」

文句無しの出来栄えですよ。いい職人が見つかりましたね。」

「ああ、アリアって言うんだが…独学で魔石や魔法陣について研究しているらしい。」

「そうなんですか…。」

ピアスを布に包み直す。

「何のために作ったのかと思っていたが：あの子を見て納得したよ。あの目は珍しすぎるな。髪が黒いとだいたい目は俺にみたいに灰色なんだが。遠くからだと黒、近くで見ると茶色。確実に狙われるだろうな。目をつけられたら逃げられない。」

この世界にも、好事家はいる。

ああいう奴らは珍しいモノを常に求めている。

「だけど、黒い髪に灰色の目は一般的です。ありふれた色。これはハルキを守ってくれます。」

守ってくれなくては困る。

ずっと、ハルキの傍にいて守れる訳ではない。

いつかは離れて、あの子は一人で歩かなくてはいけなくなる時が来る。

かならず、来てしまう。

「…お前、これからもあの子を育てるつもりか？」

「？もちろんですよ。」

急に何を言い出すのだろう。

だが、サムの目は真剣そのものだ。

「あの子にはもう話したのか？」

これから先、一緒に暮らすのならちゃんと話しておけ。ずっと隠していける訳が無いんだ。」

「…わかって、ますよ。わかってはいるんですけどね。なかなかタイミングが掴めなくて。」

あの事をハルキに話す事は、自分に対してのけじめでもある。大丈夫。話します。

だから、そんな心配そうな顔をしなくて大丈夫ですよ。

「…そういえばな、学園に天才が来たんだよ！」

「へえ。『天才』ですか。」

「ああ、まだ3年目なんだが、もう終わりそうな勢いだ。教師連中も舌を巻いているよ。」

姉のほうは普通なんだが、こっちもこっちで薬学がずば抜けていい。」

暗くなった空気を払拭しようと、話題転換をする。

気を使ってくれたのだろう。

貴族同士の腹の探り合いは得意なくせに、こっという所は変わらないい。

全てが変わり流れ続ける中で、変わらないものがあるのは嬉しい。

だけど、俺は止まっている。

変わらないのではない、止まっている。

俺を置いて世界が変わっていく、進んでいく。

俺は停滞したまま、動けない。

俺は、動けない。

満足したハルキが帰ってくるまで、あと50分。

酒を片手に談笑するフェイ達に遭遇するまであと1時間。
酔ったサムに頬ずりされて、髭が痛いと言ハルキが思っまであと2
時間。

ミニラがハルキに懐くまであと10分。
世界が動き始めるまであと…？

side・フエイ：旧友（後書き）

ちよつと、伏線頑張ってみました。

サムは女好きなダンディーなちよつとおじいちゃん寄りなチヨイ悪おやじをイメージしています。

私の立ち位置

なんだか最近、フェイさんの様子がおかしい。

嵐の如くサムさんが到来してから、なんだか挙動不審だ。(ちなみに、サムさんはこれから世界一周をするらしい。)なんとなく視線を感じて振り返ると、フェイさんがいて顔を逸らされたり、話しかけても上の空だったり…変だ。変な事でもしちゃったのかな、私耳に付けてあるピアスをなんとなくいじりながら考える。(特に細かい装飾の無いシンプルな物だけど、結構気に入っている。このピアスを付けた途端に目の色が銀色というか灰色に変わった。ビックリ。)…うん、覚えが無い。

「~~~~~ん~~~~~」

唸ってみても、原因がさっぱり分からない。だけど、もしかしたら無意識にしちゃってたりとか?だったら、言ってくれたらいいのに。だって

…あれ?

そういえば、私とフェイさんの関係って何なんだろう。

あれ?あれれ?

なんか、疑問にも思わず暮らしてたけど、なんでフェイさんはここに私を置いてくれてるんだろう?フェイさんは、転生した前世の記憶がある人で…同郷のよしみで、なのかな?

だとすると、私は居候ってことだね。

わからない。フェイさんは、私の事をどう思ってるんだろう。だって、滅多に外に出ないし、こんな森の奥に引きこもってるし、まともな来客なんてサムさんが初めてだった。もしかして、邪魔だと思ってるのかな。あ、けどいろいろいるとこの世界の事を教えてくれる。邪魔だと思ってるなら、教えない…よね？

一回りも二回りも小さくなった手を見つめる。

子供らしい、プニプニとした小さな手のひらは、最初の頃は違和感だらけだったが、今はもう慣れた。

なんで、小さくなっちゃったんだろう。そのくせ中身はそのままで、大人でも子供でもない中途半端。どうせなら精神も幼くなればよかったのに。そうすれば、悩む事もなかったのかなあ。ただ疑問に思わず流されるままに、暮せたのだろうか。

…うん、やめやめ。考えても、仕方が無い事だ。

ザアツと風が起きて、髪紐で結った髪がなびき、木々が風に揺られてザワザワと音を立てる。それは心地よく心に響いて、不安で淀んでいた心を落ち着かせた。

今度、フェイさんとちゃんと話をしよう。怖いけど、このままにしておくのが一番ダメだと思う。そのうち、ちゃんと。すぐに聞こうと思えない、先延ばしにしようとする自分の弱さが恨めしい。

もうすぐ、私がここにきて一年が経とうとしていた。

魔力

「これが魔力検査用紙です」

なにも書かれていない短冊大の紙を持って、フェイさんは説明を続ける。

「一見何も書かれていないように見えますが、特殊なインクで魔法陣が書かれています。魔力は火・水・風・土・光・闇の6種類。更に氷・雷・影・植物などの亜系を含めると10種類になります。これはまず出ないと思うので省略します。検査方法は魔力を流すだけ。」

すると、フェイさんの手にある検査用紙にじんわりと模様が浮かび上がってきた。細く複雑な模様はだんだんと濃くなり、金色の模様が浮かび上がった。

「火は赤・水は青・風は銀・土は茶・光は金・闇は黒。私は光属性なので金色になります。では、やってみてください。」

フェイから紙を手渡される。

「…フェイさん、質問です」

「なんででしょう？」

「魔力ってどう流せばいいんですか？」

「あ…そうですね…、こつ、気合を込めて…みたいな感じですかね？」

「全然分かりません」

早くも壁にぶつかつた。とりあえず魔力は生命エネルギー的なものらしい。万物に宿る物で、特殊な能力を持たない限り見る事の出ない物。強かつたりすると感じたりは出来るらしい。

「まあ、そもそも魔力の定義については研究者の中でも意見が分かれてるんですよ。選民説や万人説が主流なんですけどね。」

「へー」

とりあえず、手に力を込めて送り込む感じにする。変化なし。はあああつ！と掛け声を出してみても変化なし。

「：フエイさん。私って本当に魔力を持つてるんですか？」

「持ってますよ？同類な感じがしますし、属性もなんとなく予想がついてますしね。」

「え、じゃあ必要ないんじゃない？」

「頑張ってください」

につこりと声援を送られるが、拒否は許しませんな威圧感が。まあ、私も魔法使ってみたいし、やるけどね。なんともなしに手に持っている紙を見つめる。

魔力：生命エネルギーってこう：血みたいに全身を巡っている的な事を漫画か何かで見た覚えがある。とりあえず、ぐるぐると形のないエネルギーが全身を巡っているのを想像してみる。：なんかしっくりこない。どちらかというと、巡るというよりは発せられているイメージ。体の中心：魂とかからエネルギーが出ているのを想像する。：うん、しっくりきた。

目をつぶり、想像する。

体の中心、胸のあたりから熱のように魔力が伝わって、手に流れしていく。それを紙に送り込む。じんわりと体に留まっていた物が外

に放出されていく。

「あ…できた」

目を開けると、紙に模様が浮かび上がっていた。銀色だ。

「風ですね。良く出来ましたねハルキ。予想ではできるまでに何日か必要だと思ってたんですが…」

偉い偉いと頭を撫でられる。…急にどうした。だけど、意外と気持ちよくて頬が緩む。

すると、頭を撫でる手が止まり、離れていった。フェイさんを見ると、顔を逸らされた。

「…？どうしたの？」

「あー、うん、なんでもありません。それじゃあ明日からでも魔法の特訓しますか！」

なんとなく顔を背けてフェイさんが言う。やっぱり、様子が変わった。

とりあえず、私の魔力は風属性らしいです。

書くタイプ（前書き）

総合評価が200ptをこえた…だと？！
うっわ、物凄く嬉しいです。ありがとうございます！

貢ぐタイプ

ある晴れた日の朝。雨続きで干せなかった洗濯物を干していると、朱色の鳥がフエイさんの書斎に入っていくのが見えた。手紙を運ぶ鳥・エルクだ。

エルクとは前に手紙を運んで来た時に、ちょっと遊んだ。頭が良
いみたいで、とても楽しかった。また遊べないかなー？と洗濯物を
急いで全部干し、フエイさんの書斎に小走りで向かう。

書斎の扉を叩く。

「フエイさん。入っていいー？」

「いいですよー」

失礼しまーす、と部屋の中にはいると、フエイさんは案の定手紙
を呼んでいた。窓枠にエルクがちよこんと止まっ
ていて、おいでー
と言つと、パタパタと飛んできた。かーわーいーいー！

「サムさんから？」

肩に止まったエルクを撫でると、クルクルと喉を鳴らす。

「そうですよ。本当にあちこち行っているみたいですよ。…ん？」

フエイさんはしばし手紙の一点を見つめて固まった。そして頭を
押さえ、はーっと長い溜息をついた。

「どうかした？」

「…本当に、自由奔放と言うか、ゴーイングマイウェイと言うか」

「…？」

呆れたように、だけどこか嬉しそうにフェイさんは言う。

「研究所を、作るそうです。自分が認めた研究者達に研究する場所と資金を提供すると…その研究者達を探し始めるそうです」

「研究所？」

「…ああ、そういえばハルキには話した事ありませんでしたね。この世界では、研究はほとんど個人でやるものなんですよ。だから研究するただけの施設はほとんどありません。」

「へー、そうなんだ。それをサムさんは作るって？なんか急だね。」

「…まあ、十中八九、女がらみでしょうけどね。ハルキのピアスを作った職人は女性ですが、とても腕が良いみたいなんです。私もそう思います。そのピアスも魔道具としても装飾品としても良く出来ている。たしか…マリア、でしたっけ。その人は”魔石”について研究をしているそうなんです、このまま個人でなんの援助もなく研究を続けるのは難しいでしょうね。」

「あー、なるほど」

サムさんは貢ぐタイプなのかもしれない。耳に付けてあるピアスを触る。これ、女の人を作ったんだ。

「職人っていうと男世界なイメージがあるけど、やっぱりこっちでも女の人職人って珍しいの？」

「そうですね。女性は家に入って家庭を守る…それが一般的ですね。」

「そっかあ」

…私は女だ。体が縮んでもそれは変わらない。

いずれは、ここを離れて暮らさなくてはいけなくなるかもしれない

い。ずっと、フェイさんに頼って暮らせるとは思えない。

肩に乗っているエルクが、キュルキュルと鳴き、頬にすり寄ってきた。…やっぱり君は頭が良いよ。

その温かさに背中を押され、私は決意を固めた。

「…フェイさん、私、フェイさんに聞きたい事があるんです。ずっとずっと、聞きたかった事があるんです。」

深呼吸をして、フェイさんの目を真っ直ぐ見上げた。

「フェイさんは私の事どう思ってるんですか？」

side・フェイ：背中合わせの向かい合わせ

「私の事どう思ってるんですか？」

最初に思った事は、「え、なにこの恋人チックなセリフ」だ。どこで覚えて来たんだ！と言いそうになったが、ハルキは16歳だったという事を思い出して踏み止まった。

「どうって…：どういう事ですか？」

とりあえず、質問の趣旨が今一分からなかったので聞くと、ハルキは少し俯いて

「…フェイさんが、最近変で、目を合わせてくれなくて、なんとなく避けられてる感じがしたの…：もしかして、嫌われちゃったのかなって、思ってた」

その声は何かを押し殺すように震えている。

「それで、私とフェイさんの関係って何だろうって考えたの…：私は居候^{いこう}って事になるのかな？」

私ね、フェイさんにとっても感謝してるの。いつのまにか森に倒れていて、体が小さくなっていて、三つ目の狼…：シーザだっけ…：それに、追いかけられて、とても、怖かった。たぶん、フェイさんが助けてくれなかつたら死んでたんだと思う。…：助けてくれて、こうしてフェイさんの家に住まわせてもらって、本当に感謝してるの。」

ハルキは深呼吸をして伏せていた顔を上げた。

「フェイさんがなんか変なのは私がかやつちやつたからじゃないのかなって思ったの。なにか嫌な事があつたら言っ^なて欲しいの。私、ちゃんと直す^{なお}からっ^つ」

嫌いにならないで！

ハルキから、悲痛な叫び声が聞こえた。瞳からは涙が今にも零れ

落ちてきそうだ。

「…嫌いになんかなれませんか」

抱き上げると、ぼかんとした表情で見てきた。それが可愛らしくて、ぎゅっと抱きしめる。子供特有の高い体温が心地よい。

「不安にさせてごめんね、ハルキ。…そうだよ。不安にならないわけがないよね」

何も知らない異世界で、ハルキが頼れるのは俺だけ。ハルキは俺が見捨てたら生きていけないだろう。ハルキも無意識にかもしれないけどそれを分かっている。

「俺も、ハルキに言わなくちゃいけない事があるんだ」

俺がハルキの事をどう思っているかって？

…認める、認めるよ。俺はハルキの事を自分の娘みたいに思っている。

最初は同情で、郷愁の念から。

だけど、一緒に暮らしているうちに、小さい体でくるくる動き回る所とか、俺がこの世界について話するときの興味深々の目とかが大切になった。

恐る恐る、ハルキが首に手を回し、ぎゅっと抱きついてきた。

ああもつ可愛いなあ。…俺、親バカ決定かも。

side・フェイ：背中合わせの向かい合わせ（後書き）

フェイの一人称が俺になったのは、心境の変化があったから。

フェイは親バカ決定。最初の「どこでそんなセリフ覚えてきた！」は父親の心境：みたいな。フェイは娘はどこにもやらん！な感じにしようと思ってます。

秘密の告白

エルクの足に手紙の返事をくくりつけ、「頼むよ」と言えば、エルクは承知したと言わんばかりに高らかに鳴く。朱色が青に溶けて行った。

「落ち着いた？」

フェイさんの言葉に、こくりと頷く。

フェイさんが入れてくれた紅茶はとても美味しくて温かくて、気分が落ち着いていた。

「それじゃあ、どこから話そうか」

年甲斐もなく泣きじゃくってしまって、少し恥ずかしい。…あ、だけど体は5歳ぐらいだから年甲斐もなくはないのかな？

「うん…ハルキ、俺って何歳位に見える？」

訝しげにフェイさんを見ると、もう一度「何歳位に見える？」と聞かれた。

フェイさんが、「俺」っていうのは、なんだか違和感があるけど、敬語が無くなったのがうれしい。なんだか、壁が無くなった気がするから。

「何歳って…」

フェイさんの顔を観察してみる。

ベージュ色の柔らかい色合いの髪と瞳。肌もきれいで、一見すると凛々しい女の人に見える。

「20代。25 6歳かな」

そう答えると、フェイさんはニヤリと笑った。

「残念、全然違う」

「え…じゃあ、もしかして30代？」

「違う」

「じゃあ…10代？」

「全然違う」

そしてフェイさんは爆弾を落とした。

「57だよ。後3年で60だ」

「…うっそだあ」

フェイさんの顔をまじまじと見つめる。どうみても20歳以上には見えない。

「まあ…それが普通の反応だね。言っとくけど、サムと同年だから」

「うっそだあ」

もう一度言う、うっそだあ。

「嘘じゃないよ。それにこんな嘘をつく必要もない。

俺には前世の記憶…いや、今の俺も前の俺も同じだから、ちょっと違うけど…転生したってというのは話したよね？」

「うん」

共通点が沢山あったから、たぶん、フェイさんがいた世界は私がいた世界と同じ世界。多重世界って言葉があるし、似ているようで違う世界って可能性もあるけど。

「それで、まあ…気がつくとおギヤーツと生まれてたんだよね。…ハルキは、この世界の種族って覚えてる？」
「人間とエルフ族と獣人族でしょ？」

エルフ族は、尖った耳に高い魔力と長い寿命が特徴。

獣人族は生まれつき獣の姿と、人の姿を持ち、自らの意思で体人と獣に切り替える事の出来る一族。…だったはずだ、記憶に違いが無ければ。

「それじゃあさ、人とエルフの間に生まれた子は、どっちになると思う？」
「ハーフじゃないの？」

「この世界では、ハーフって言う概念はないんだ。異種族間で生まれた子は、必ず両親のどちらかの種族になる。」

遺伝の法則は無視なんだ。まあ、異世界だから、なにかしら違う法則があってもおかしくないか。

「じゃあ、この話の流れからすると、フェイさんは異種族間に生まれた子供って事？」
「うん、察しが良いね。母がエルフで、父が人間だよ。それで俺は人間として生まれた。…外見はね。」

フェイさんは大きく息を吸って、ゆっくりと静かに吐きだした。
「そう…外見は人間なんだ。だけど、人よりも遥かに強くしなやか

な魔力、長い寿命。俺はエルフの特徴を人の身でありながら受け継いでいたんだよ。これはありえない、あつてはいけない事なんだ。」

あべこべで、異質で、奇妙なのだと、暗い声で呟く。

「成人した頃から急に成長が遅くなった。30を越えたあたりから若作りすぎて変だと思った。それで俺は『人の身でありながらエルフの特性をついでいる』という仮説を立てた。それで、この人里離れたこの屋敷で暮らし始めたんだ。ここで研究をしながら、10年、20年…俺は老けなかった。時々会いに来るサムが、時の経過を証明していたよ。」

…ハルキ、俺がハルキを助けたのは偶然だよ。だけど、一緒に暮らしているのは…俺と一緒にいたから。中身と外見が違うあべこべな存在。同族のように感じたんだ。同じ存在に思えたんだよ。この世界で、どっちつかずの俺には同じ存在がいなかったから。」

痛いぐらいに拳を握っているのが見えた。

「だけど、けど今は…ハルキの事を娘みたいに思ってる。」

だからハルキ…君が良ければ、俺の養子にならないか？」

「え…？」

「ごめんね、急に…ずっと、言わなくちゃって思ってたんだけど、なかなか言い出せなくて。」

俺は、あつちで死んだ記憶があつて、こつちで生まれたから、あつちにはもう帰れないんだと思う。だけど、ハルキはもしかしたらあつちに帰れるかもしれない。だけど、帰れないかもしれない。自然に時が経てば帰れるのか、それともなにか帰るための特別な方法があるのか、はたまた帰る事なんてできないのか…。わからないんだ。

ハルキ、どっちつかずほど苦しいものはない。その事を、俺は嫌

というほど知っている。だから、選んで。あつちの世界の未練を切り捨てて、この世界で生きるか、それとも帰るのを諦めないで方法を探し続けるか、決めて。」

白い夢

フエイさんは転生者で

人間だけど人間じゃなくて

エルフじゃないけどエルフで

私は

この世界で生きるか、元の世界に戻るか。

自然に帰れるのか、帰る方法を見つけないとなのか、帰れないのか。

ぐるぐるとフエイさんの言葉が頭の中を渦巻く。

混乱する私に、フエイさんに「今日はもう休んで」と言われてしまった。外を見ると、朱色の夕日がとても綺麗だった。フエイさんの苦笑いと、頭を撫でる大きい手がなんだか切なかった。

ベッドに潜り込み、ぼんやりと夜空を眺める。

この世界は星が綺麗だ。星座とか、星の配置なんて知らないから、あつちとは違う星空なのかもしれないけど、綺麗な事には変わらないがない。キラキラ輝く、宝石とも違う輝き。

目を閉じれば、星は見えなくなって、完全な闇がやってくる。

私は、どうすればいいのだろう。

ぐるぐるぐるぐる。考えれば考えるほど分からなくなる。

だけど、やってくる睡魔には勝てなくて、ゆっくりと、意識が夢の中に引き込まれていった。

なにもない、白いだけの空間。

無機質で人工的なものを感じて、ああ、これは夢なのだと思感的に悟った。

真っ白い世界

どこまでも白くて白い世界

大地と空の境目などなく

大地も空も存在せず

風も吹かず、音もなく

冷たさもなく、暑さもなく

光もなく、影もない

嫌になるほど真っ白な世界に、私は何故か既視感を覚えた。そして、私はいつもの通りにゆっくりと振り向いた。

「…久しぶり、って言うべきかな？」

「どちらかというところらしい」かしら

白い髪

白い肌

白い服

病的なまでに白に埋め尽くされた女がそこにはいた。紅い唇がどこか艶めかしい。

「これは私の夢だよ。だから、”いらっしやい”は間違っている。

それだとまるで、私がああなたの夢に入り込んでいるみたいじゃない。

「あなたにとって夢でも、私にとっては現実よ。あなたが私の住居

に来ているの。だから、”いらっしやい”で間違いはないわ」

「こんな場所に住んでるの？趣味悪いわね」

白い女は紅い唇を歪ませて笑う。

「それで、異世界はどう？ハルキ」

「…なんであなたが知っているの」

「あら？これはあなたの夢なのでしょう？そして私はあなたが作り出した幻。だったら、あなたの一部である私が知らないはずがないわ」

この夢は、ハルキが幼い頃からずっと見ている夢だった。白い空間に白い女がいるだけの夢。夢に見れば思い出すのに、現に戻ると忘れてしまう夢だった。

「…あなたと話すと調子が狂う」

「光栄ね」

クスクスと白い女は無邪気に笑う。

「…異世界は、楽しいよ。知らない事が沢山あって、知りたい事が沢山ある。」

「あらそう、よかったじゃない」

笑う笑う、女が笑う。

「だけど、あなたは迷っている」

「…うん、わからないんだ。」

私は、この世界に残りたいと思っている。だけど、あっちの世界を失いたくないと思っている」

笑う笑う、白い女は笑う。少女のように無邪気に笑う。

「うふふ、あつちに残していく物に謝罪や未練はないのね」

「残していく、物…？」

「親、友達、知り合い、大切なもの、離したくないもの…こつちを選べば、永遠に戻らないもの。あなたが失いたくないと思っっているのは、あつちで築き上げた地位や経験だけ。失いたくないと思っっているのは、こつちの世界で新しい道を作るのが不安だから。ああ、悲しいわあ、なんて冷たい子なんでしょう。あなたは両親や友になんの未練も抱いていないなんて！」

声高らかにオペラ歌手のように芝居がかった女の言葉に、思わず微笑みが漏れる。

女が、怪訝そうに私を見た。

「…娘が、入院しても見舞いに来ない、授業参観にも卒業式や入学式、運動会にも一回も来ない、何年も顔を合わせていない、何年も言葉も交わしていないのに、なんで私が未練を抱かないとなの？私がいなくなれば、いつか風化して、誰も私を思い出す事はなくなるのだろうね。私は、それぐらいの存在よ」

「うふふ」

彼女が笑って、私が笑って、はいお終い。

「滅ベクソ女。あんただけは好きになれない。」

「酷いわねえ。だけど、私はあなたのこと好きよ？」

女に背を向け、夢から覚めるために歩きだす。

ここは、怖い。ここにいると私まで真っ白になって、この世界に溶けてしまうのではないかと思うと、背筋が震えた。一刻も早くここから抜け出したかった。

きつと私は目が覚めたら、この夢を忘れているのだろう。思いだ

す事もない。

「あ、そうだ。あなたをこの世界に連れてきたの、私よ」
「は…?」

世間話をするかのような気軽さで白い女は言った。
唐突な言葉に、思わず振り返ってしまった。

「私ね、ずっと波長の合う女の子を探してたの。男にもいたんだけど、やっぱり女の子の方がいいわね。何年ぐらいいかなあ…忘れちゃった。だからね、私に会いに来て。夢の中じゃなくて現実で。」
「…なんで、あんたに会いに行かなくちゃなのよ」

女は笑う。少女のような笑みではなく、妖艶な悪夢みたいに纏わりつくような笑みで。

「あなたは私に会いに来るわ。だって、私がそう望んでるのだから」

チチチツと鳥の囀りが遠くに聞こえた。

「ん…朝？」
なんだか寝た気がしない。

「…とりあえず、朝ごはん作ろう」

閉じそうになる瞼を気合で開けながら、私はベッドから降りた。

迷子の子供たち

フエイさんが、不安そうな顔で私を見ている。その顔がなんだか、迷子になった子供のようで、なんだか可愛かった。

「…あのね、フエイさん」

考えた。私はどうすればいいのか、沢山、沢山考えた。あつちの世界の記憶が浮かんでは消えていく。楽しい事もあつたし、悲しい事もあつた。いろんな事があつたけど…私にとって、あの世界は寂しい場所だった。

家に帰っても誰もいない。生活費だけを置いていく親。学校の行事に来てくれなくて、友達をいつも羨ましく思っていた。肩車をしてもらった事がないから、フエイさんに肩車をしてもらって楽しかった。繋いだ手は温かった。悲しいほど、温かった。

「私、この世界に残るよ」

あのね、フエイさん。あなたが娘のように思っているって言うってくれて、とてもとても嬉しいの。胸の中に温かくてちょっとむず痒いものが詰まって、パーンツで風船みたいに弾けそう。

フエイさんが震える声で

「本当にいいの…?」

涙が今にも零れ落ちそうだ。

「うん。私は、この世界をもっともつと知りたいたんだ。」

それにね、フェイさんが人間でもエルフでもどっちでもいいんだ。私にとつてのフェイさんは、命を助けてくれた恩人で、肩車をしてくれたり手を繋いでくれる温かい人で、朝が弱くて、実験に夢中になると食べるのを忘れちゃう、たまに世話がかかる弟みたいで「

私とあなたは似た物同士。もしかしたら、私も迷子なのかもしれないね。」

「フェイさん、私はあなたを家族だと思っていいですか？こんな私だけど、本当に、そう思っているの？」

そう言えば、苦しいぐらいに抱きしめられる。

ぎゅーって抱きしめ返したら、抱きしめる力が強くなった。

温かいなあ。私まで泣いちゃいそうだよ。

…ごめんなさい。

私は、あの世界を捨てます。

誰かの笑い声が聞こえた気がした。

穏やかな日々

この世界で生きる事を決めてから、3年が経った。

ハルキ・クルーニクス、ただいま8歳です。スクスクと成長して目線が高くなりました。前の世界では、平均的よりも低めだったから、このまま伸びてくれないかなーって思ってます。目指せ平均以上！できれば胸も育ってほしいなあ。だってさあ、この世界の人ってポインな人が多いんだもん！羨ましい！同じもの食べてるはずなんだから、身長も背丈も前より大きくなってもいいと思うんだ。…あまり期待はしてないけど。

「ハルキー？」

「ちよつと待つてー！もうちよいで干し終わるからー！」

遠くから聞こえてきたフェイさんの声に、大きな声で返事をする。私の名前からも分かったと思うけど、私はフェイさんの養子になりました。前の世界には少し未練があるけど…それを上回るぐらい、私はこの世界に魅せられたんだ。

「よつし、洗濯物終わり！」

今日の天気はいいから、早めに乾くんだろうな。

ソヨソヨと風が吹いて、洗濯物を揺らす。穏やかな日々が、そこにはあった。

穏やかな日々（後書き）

連載を続けるか、この話で終わらせるか迷い中。

区切りが良いので、とりあえずここまですを第一章にします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5353v/>

目覚めたらファンタジーな異世界でした。

2012年1月6日20時02分発行